

自由と正義の国アメリカ：真の公民権とは？

12/29/2009

高尾 裕香

はじめに

1862年のリンカーンによる奴隷解放宣言後、アフリカ系アメリカ人（またその他マイノリティー）が法の下での平等を勝ち取るまでに100年以上の月日を要した。美談の様に扱われているリンカーンの奴隷解放宣言だが、不足していた兵力を補うための政治的判断としての奴隷解放だったということは意外と知られていない。その後、多大な犠牲を払い実現された法の下での平等だが、公民権法施行からさらに40年以上経った今も、アフリカ系アメリカ人が直面する様々な差別は法の施行前とは違った形で続いている。それは、リンカーンの奴隷解放宣言に象徴される、単なる政治的判断による形ばかりの平等がもたらした当然の結果と言えるだろう。

引き摺る経済格差と人種差別

2007年の国勢調査局の調査によると、全国民に対するアフリカ系アメリカ人の割合は約13%なのに対して、貧困率は国全体の貧困率の約2倍、白人の約3倍である。今なおアフリカ系アメリカ人の就職率は同じ条件の白人よりも低く、逮捕歴のある白人よりも、逮捕歴の無いアフリカ系アメリカ人の方が就職率が低いという驚くべき調査結果もある

(Keeanga-Yamahtta, 2003)。1990～1991年にかけてのリセッションで多くの労働者が職を失った。オフィスや工場は費用削減のため都市部から郊外、あるいは海外へ移り、都市部には職を失った貧しい層、主にマイノリティーが残った。結果、都市部の学校はアフリカ系アメリカ人含む有色人種ばかりになり、郊外の学校よりも格段に低い質の教育を受けることになる。極端な例でいえば、都市部の学校では教科書すら足りず、校舎の天井は一部壊れているような状況なのに、郊外の白人だらけの学校では一人につきPCが2台ほどの割合で用意されていることもある(Kozol, 1999)。1960年代の公民権運動での成功が、再度巻き戻されているのである。

また、工場が郊外・海外へ移転したため、現在都市部で需要のある仕事はサービス業、あるいはマネージメントとなる。大半はサービス業へ就職を希望することになるが、威圧感を与えると考えられているアフリカ系アメリカ人男性の場合、こういったサービス業には採用されにくい。また、アフリカ系の名前を持つ場合、履歴書で判別できるため書類審査で落とされる場合も多く、低所得層が住むゲットー出身の場合、住所によって不採用になる場合もある。

貧困層に対するイメージ変化と政策

ではなぜアフリカ系アメリカ人に対するイメージがこんなにも悪いのだろうか？単純な人種差別の名残なのだろうか？ここに興味深い調査結果がある。貧困削減政策であ

る”War on Poverty”（貧困に対する戦争）が打ち上げられた1960年代半ば以降、徐々に貧困削減・福祉に対する国民の支持が低下し、政府の政策も福祉に大金を使わない方向に変わっていった。1960年代からの貧困層に対するイメージもそれとともに変わっており、これはメディアによる影響が大きいと言える。1960年代以降の貧困政策や福祉、生活保護などがトピックになっている場合のメディアで使われた写真・映像を分析した調査によると、政府が貧困政策に重点を置き、国民の支持も高かった時代、新聞やマガジンに登場する記事に使われる写真・映像は白人のものが比較的多かった。反対に、不当に生活保護を受けているなど貧困層にとってネガティブなトピックの場合はアフリカ系アメリカ人のものが使われている割合が非常に高かった。徐々に貧困層のイメージはアフリカ系アメリカ人化し、貧困の理由は個人的な問題という風潮が強くなる。”Welfare Queen”（主に福祉により贅沢な生活を送っているシングルマザーを指す）という言葉まで生まれ、生活保護を受けながら贅沢な生活を送っているアフリカ系アメリカ人女性のイメージが浸透した。

さらに、「犯罪24時」の様なドキュメンタリー番組ではアフリカ系アメリカ人・中南米出身の男性の犯罪現場を写す事が多く、典型的なコカインの売人が高卒の白人であるにも関わらず、アフリカ系アメリカ人男性＝ドラッグの売人、犯罪者、そして怠惰で暴力的というイメージが定着してしまった。このように、貧困層のイメージはアフリカ系アメリカ人化しただけでなく、貧困の理由は個人的な問題という認識まで高まってしまったのである。政府はメディアを使い意図的に貧困者の顔を作り上げ、貧困者＝アフリカ系アメリカ人＝怠惰という図式を作り上げたと解釈できるのである。

警察・司法の差別

公民権運動時代の警察の残酷さは有名だが、今もアフリカ系アメリカ人に対する差別は続く。アフリカ系アメリカ人が職務質問される確率、検挙される確率、また実刑を受ける確率は白人と比べて不当に高く、例えば不法ドラッグ所持で逮捕された場合のアフリカ系アメリカ人青年の実刑率は白人青年の場合の48倍と言われている（Keeanga-Yamahtta, 2003）。先ほども述べたとおり、アフリカ系アメリカ人の全人口に対する割合はたった13%なのにも関わらず、アメリカ全土で服役中の人口の半分はアフリカ系アメリカ人である。こういった統計は単にアフリカ系アメリカ人が野蛮で犯罪率が高いという解釈もでき、白人特権を維持したい層にとっては便利なデータである。しかし、逮捕前からアフリカ系アメリカ人に焦点を絞っていれば検挙率が自然と高くなるのは当然であり、実刑率が高ければ服役している割合が高くなるもの当然である。現在アメリカでは刑務所の民営化が進んでおり、多くの大企業が刑務所に業務を委託している（IBM、Microsoftなど含む）。アフリカ系アメリカ人受刑者や他の有色人種が発展途上国よりも安い労働力を提供しているのである（Davis, 1998）。こういった刑務所はPrison industrial complexと呼ばれ、現代の奴隷制度に匹敵するという批判も多い。また、服役中の人口は失業者とはカウントされないため、実際のアフリカ系アメリカ人男性の失業率は服役中の人口を入れると3割

以上高くなるとも言われている。

貧困と差別が与える影響：都市部ゲッターの場合

先にも述べたとおり、都市部には有色人種の貧困層が残された。ゲッターに住むアフリカ系アメリカ人家族は大きく二つに分けられ、一つは中流階級のモラルを信奉し、教育や教会での集まりや奉仕に重点を置く、“decent”（上品な、きちんとした、という意味）家族。もうひとつがストリート家族であり、反社会的なストリートの価値観を重んじる家族である。ゲッターに住んでいる限り、decent 家族もストリートのルールは知らなければ生き残れない。ストリート家族では定職についている大人が少なく、アルコール中毒、ドラッグ中毒のものなど、親が子供の面倒を見られない場合も多い。見本となる大人が周りにいないのである。そのため何らかの庇護を必要としている場合（経済的、精神的、身体的など）、違法行為を行っている大人に助けを求めるしか選択肢がない場合もある。

こういったゲッターでは子供も大人も“Code of the Street”、すなわちストリートのルールを学ばなければいけない。ストリートの価値観とは主に“自衛”、“リスペクト”に重きを置く。警察は白人の手先というイメージが強く信用はできないため、自分の身は自分で守る、という規範が自然と受け入れられている。自分の身を守れないものは弱者となり、敬意を失う。時には殺される場合もある。簡単に言うと、他者を刺激せず、なめられないことが一番大事なのである。そのため、暴力的な反社会的モラルが推進される。このストリートカルチャーは貧困・差別からくる絶望感、孤立感から生まれたと考えられ、自分たちを孤立させ差別したメインストリーム（主流）に反する、反体制的なカルチャーとなった。

こういった都市部のゲッターの暮らしを歌ったのがギャングスターラップである。ブルースがアフリカ系アメリカ人の悲しみを表現した音楽ジャンルであるように、現代のゲッターの苦しみ、怒りを歌ったものがギャングスターラップと言えるだろう。暴力、レイプ、ドラッグ、犯罪、銃撃戦、殺人などの過激な内容を歌っており、批判も多い。しかし、こういったジャンルが確立された背景には、奴隷制度から現在もなお形を変えて続く人種差別に基づいた怒りや悲しみがあることは間違いない。

心に残る傷と差別の内向化

人種差別が成長過程の子供に与える影響は大きい。1990年～1992年にかけてメリーランド州の中学校で行われた調査によると、クラスメートや教師から受けた差別は勉強に対するモチベーションに影響するだけでなく、自尊心を傷つけ、精神的な健康を妨げるという結果が出た。また、問題のある行動をとる生徒の多くは差別を受けたことがあるという（Wong, C. A., Eccles, J.S. & Sameroff, A., 2003）。

“Doll Test”（ドールテスト）をご存じだろうか？アフリカ系アメリカ人の少女に2体の同じ人形を渡し、どちらかきれいだと思う方を選んでもらうというものである。

2体の人形で唯一違う点は、片方は肌が黒く、もう片方は肌が白という点だ。まだ公民権運動まっただ中の1954年に実施され話題となり、2006年に再び実施されたが、残念な結果となった。少女の大半は肌が白い人形を選び、理由は“肌が白いから”という。50年以上前と、現代のアフリカ系アメリカ人少女たちの肌の色に対する美的感覚は変わっていなかったのである。これにはいつくか理由が考えられる。白雪姫も、シンデレラも、大半のセレブリティも、ましてやイエスキリストまで白い肌を持っている。人気のあるアフリカ系アメリカ人アーティストでさえ混血が多い。日々の生活で感じる差別的体験を加味すれば、こういった結果になることは驚きではない。長年の人種差別により、アフリカ系アメリカ人の中でも差別の内向化が起きているのである。黒い肌を肯定できない。ハリウッドに代表されるメディアに「白い=美しい」という図式を埋め込まれてしまっているのである。

オバマ政権で人種を考える

国務長官まで上り詰めたコリン・パウエル氏、コンドリーザ・ライス氏に続き、今年一月に米国大統領に就任したバラク・オバマ氏の登場によりアフリカ系アメリカ人のアメリカにおける地位は揺るぎないものになったかに見える。しかしこういった一部のエリートの存在が、大部分のアフリカ系アメリカ人の苦しみを覆い隠してしまっているのも事実である。自由の国アメリカでは、アフリカ系アメリカ人でも努力すれば大統領にもなれる。ということは努力が足りないから多くのアフリカ系アメリカ人は今も貧しいのだ。個人主義で平等にチャンスが与えられるという建前の上に成り立っているアメリカでは、巧妙に隠ぺいされたマイノリティー差別化システムによりそういった口弁がまかり通ってしまうのである。

さて、先に登場したアフリカ系アメリカ人の3人の外見に共通する点があるのに気がつくだろうか？肌の色である。以前アメリカでは、“One Drop Rule”といって一滴でもアフリカ系の血が混ざっていれば黒人として扱われていた。しかし、現実には肌の黒さ加減でも階級が存在していたのである。“Brown Paper Bag Test（茶色の紙袋テスト）”というものがある。もともとは20世紀初頭に上流階級のアフリカ系アメリカ人社会で実施されていたテストだが、小さい商店などで良く使われる、茶色い紙袋よりも肌が黒ければエリートとして認められない、というものである。有名大学の社交クラブや、上流階級のアフリカ系アメリカ人が参加する教会グループ、市民グループなどで実際に使われていた。内向化された人種差別の代表的な風習ともいえるこのテストだが、現在では表面上は非難されており廃れたかに見える。しかし現在でも完全には無くなっていないという。実際、オバマ政権で重役ポストに就いているアフリカ系アメリカ人を見てみると、ほとんどが比較的肌が白いアフリカ系アメリカ人なのである。エリック・ホルダー（司法長官）、メロディー・バーンズ（国民政策審議会議長）、スーザン・ライス（外交政策顧問）、バレリー・ジャレット（大統領上級顧問）・・・これには少なくとも3通りの解釈が可能である。1)

単純に内向的差別の顕在化、つまり国家レベルで **Brown Paper Bag Test** の結果が見られるようになった。2) **Brown Paper Bag Test** が受け継がれていたと仮定すると、オバマ政権樹立時に重役ポストに就くような可能性のあるポジションに居たアフリカ系アメリカ人は、そもそも肌が白かった可能性が高い。よって必然的に重役ポストに収まったアフリカ系アメリカ人は肌が白い人が多い。3) 白人のアフリカ系アメリカ人登用に対するアレルギー反応を回避するため、戦略的に受け入れられやすい肌の白いアフリカ系アメリカ人を登用した。私見としては、2と3のコンビネーションではないかと予想するが、皆さんはどうだろう。

なにはともあれ、これは全て進行形で現実に起こっている。差別の内向化はたびたび議論されているし、実際に肌の白いアフリカ系アメリカ人の方が高いポストに就いている確率が高い。私個人、アフリカにあるウガンダ共和国に滞在している際、たびたびウガンダ人（性別問わず）に「あなたのような肌の色の人が好き」と言われた経験がある。「自分と同じような肌の黒いのはだめだ」という否定的なコメントも何度も聞いた。肌が脱色されるという塗り薬も人気があった。現在まで続く差別の歴史、経済的格差から、「白＝美＝富」という図式が出来上がってしまっているのである。今後のアメリカにおける真の公民権獲得のために、国のシステム改革、非有色人種の意識改革はもとより、アフリカ系アメリカ人の中でも自己肯定の改革が不可欠であるだろう。

参考文献

- Anderson, E. (1994). "The Code of the Streets: Decency, Violence, and the Moral Life of the Inner City".
<<http://www.theatlantic.com/politics/race/streets.htm>>Accessed. Dec.18,2009.
- Akazia, J. "African Americans in the Obama Administration: The Brown Paper Bag Test." Mar.28, 2009. *Thoughts from the Akazia files*, Blog.
<<http://akaziaj.blogspot.com/2009/03/african-americans-in-obama.html>>. Accessed. Dec. 28, 2009.
- Davis, Angela. (1998). *Masked Racism: Reflections on the Prison Industrial Complex. Color Lines*, Fall.
- Edney, H. T. (2006). "New 'doll test' produces ugly results"
The Final Call. Last updated. Sept.14, 2006.
<http://www.finalcall.com/artman/publish/National_News_2/New_doll_test_produces_ugly_results_2919.shtml>. Accessed. Dec. 28, 2009.
- Freeman, Gregory. (1997). Media put black face on poverty: media portrayal of poor blacks. *St. Louis Journalism Review*.
- Keeanga-Yamahtta, T. (2003). Civil rights and civil wrongs: Racism in America Today. *International Socialist Review*, Issue 32.
<<http://www.isreview.org/issues/32/racism.shtml>>Accessed. Dec.18, 2009.
- Kozol, Jonathan. *Savage Inequalities: Children in America's Schools* (1999).
U.S. Census Bureau. <<http://www.census.gov/hhes/www/poverty/poverty.html>>
Accessed. Dec.28, 2009.
- Wong, C. A., Eccles, J.S. & Sameroff, A. (2003). The Influence of Ethnic Discrimination and Ethnic Identification on African American Adolescents' School and Socioemotional Adjustment. *Journal of Personality*, 71:6, 1198-1232.